下野市立吉田西小学校

１　学校課題

「自分の言葉で考え、伝え合える児童の育成」
～一人一人の力を高め、思考を広げ表現できるようにする取組～

２　研究計画

（１）課題設定理由

本校では、数年前から、コミュニケーション力を育成するために、自分の思いを言葉にして伝え合うための取組を続けてきた。昨年度までの研究で、みんなの前で発表する技能が向上し、少人数での話し合いがスムーズに進められるようになってきており、発表や話し合いの場での表現力については少しずつ成果が表れてきている。しかし、型通りではなく自分の言葉できちんと伝え合うには、まだ語彙力が十分とは言えない。また、読みのアセスメントの結果から、文字を読んだり書いたりすることに支援を要する児童がいることも分かってきた。

そこで、本年度は、思考力・表現力を豊かにし自分の言葉で伝えることができるようにしていくために、言語の基礎となる語彙力を伸ばせるような指導の工夫や、日常活動に生かせる方法について研究していきたい。また、読みのアセスメントを活用して、個の特性にも配慮しながら取り組んでいくことで、副題のように一人一人の力を着実に伸ばしていきたいと考える。

伝え合う力を「共感的な人間関係を土台に、豊かな語彙をもち、適切な言葉を選んで自分の考えを広げたり深めたりする力」ととらえ、個に応じた適切な支援にも努め、言語活動を通して思考力・表現力の向上をめざして研究を進めていくものとする。

（２）めざす児童像

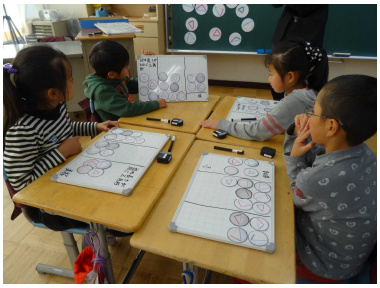
低学年・・・友達の発言をきちんと聞き、それに対する意見をわかりやすく伝え、思いや考えを広め合える。

中学年・・・相手や場を意識して互いの意見の共通点や相違点を考えながら伝え合い、思いや考えを高め合える。

高学年・・・目的や意図に応じて思いや考えを伝え合い、互いの意見を比較しながら考えを深め合える。

（３）研究の方針

・研究授業を通しての課題への取組と評価（思考過程の見られる提案授業、視点児童と支援の手だての明確化、ユニバーサルデザインのアイディアの共有化）
・学習意欲と効果を高めるための言語環境、読書環境の見直し
・語彙力を高めるための取組（音読・フラッシュカードの活用等）
・思考の場を設けるための指導計画・教材・評価等の工夫
・表現活動の日常の取組（日記・読書記録・スピーチ等）
・日常生活での人間関係を基盤にしたコミュニケーション力の育成
・個に応じた適切な支援の充実（具体的な支援の手だてを増やしていく）
・読みのアセスメントの実施と指導



３　研究内容

（１）研究授業を通しての課題への取組

期日	学年	単　元　名	授業の視点
6／17	5年	小数のわり算（算数）	・立式に必要な部分を線種分けすることは、自力解決の際に役立てることができたか。 ・実物投影機を使った発表をすることは、考えを正しく伝えるために有効であったか。
7／6	4年	組み立てを考えて書こう「自分の考えをつたえるには」（国語）	・センテンスカードの並べ替えは、理由とそれを裏付ける事例についての理解に役立ったか。 ・書き出しの言葉や文末表現を提示することは、事例を集めるのに効果的だったか。
9／16	2年	読んで考えたことを話そう「どうぶつ園のじゅうい」（国語）	・ワークシートを２種類用意して選ばせたことは、書くことへの支援として有効であったか。 ・グループでの発表は、自分の考えを確認するために有効であったか。
10／19	6年	違いを受け入れて４－(2)公平公正・社会正義「もうひとつのワールドカップを知って」（道徳）	・学習内容の焦点化、共有化を図ることで、児童の価値理解が深まり、これまでの自分を見つめたり、今後の自分の在り方について考えたりすることができたか。
11／4	1年	くらべてよもう「じどう車くらべ」（国語）	・単元全体の流れを示した学習カードを使用することは、見通しを持った主体的な取組につながったか。 ・写真や映像、ミニカーなどの提示は、「しごと」と「つくり」を考える活動に有効であったか。
11／27	3年	三角形（算数）	・一人一人が三角形を作る活動は、三角形を分類する上で効果的であったか。 ・グループ学習を取り入れることは、全員が自分の考えを持つことに有効であったか。
12／9	5年	自動車工業のさかんな地域（社会）	・考えをノートにまとめる際の支援は、個に応じた有効な支援であったか。 ・グループでの発表や話し合いは、全体での発表で自分の考えを正しく伝えるために有効であったか。

（２）日常の授業を通しての課題への取組

日常の授業では、重点授業として毎週１時間を週案に位置づけた。全学年の重点授業の一覧を掲示して、その時間は、誰でもその授業を参観することができるようにした。週案には、重点授業の具体的方策、授業後評価と改善策を記入する欄を設け、本年度の重点である基礎的な力を高め、思考力・表現力の育成を図った。

（３）個に応じた支援への取組

昨年に引き続き、宇都宮大学教育学部准教授原田浩司先生を講師に、個に応じた適切な支援について授業を通した研修を実施した。３回の研修を実施し、その子の持っている力を伸ばす手だてや読み書きのトレーニングの大切さなど、支援の仕方についての具体的な話を伺うことができた。

４　本年度の成果と課題

・学習のユニバーサルデザイン（焦点化・視覚化・共有化）を意識した授業を行うことで、どの子にもわかりやすい授業となり、学習意欲が高まった。また、話し合い活動を通して自分の考えをわかりやすく伝えることができるようになってきたので、更にわかりやすく話したり聞いたりできるよう、多様な表現方法での伝え合いの仕方を工夫していきたい。

・授業の際､書き込む部分を少なくしたワークシートを用意し自分で選べるようにしたことで、書くことへの抵抗が少なくなり、意欲的に取り組めたが、自分の言葉で書くことは難しい。また、書き慣れるための時間の確保が必要である。

・毎週、重点授業を１時間設定して週案に位置づけたことで、学校課題を常に意識しながら授業作りができた。日常の授業の中で、課題解決に向けての手だてを工夫をしたり検証したりすることとなり、有効な自己研修となった。

・全学年で読みに関するアセスメントを実施することができたので、それをもとに個への支援を計画的に行っていきたい。そのための時間の確保や調整などをしていく必要がある。

・児童一人一人の良さを引き出し、様々なニーズの児童に対応していけるよう、効果のあった手だてを実践していき、より個に応じた支援ができるように研修を深めたい。